

「ルツ記とヨナ書をめぐる考察 －摂理の信仰に寄せて－」¹⁾

小 友 聡

I. 序論的考察

「摂理の信仰」という主題に寄せて旧約聖書神学的な考察をすることが本稿の目的である。具体的には、ルツ記とヨナ書についてこの主題を論じるが、その前に序論的な議論をさせていただきたい。序論的議論とは、この主題をめぐって筆者がすでに書いた論文の紹介である。筆者は論文集『旧約聖書と教会』（2022年）に「試練と摂理」という主題で論考を書いた。これは、もともと並木/荒井編『旧約聖書を学ぶ人のために』（世界思想社、2012年）という初学者向けの旧約聖書学入門書に寄稿したものである。「試練と摂理」について聖書学的に説明するとどうなるかが論じられている。これは、内容的には、創世記の族長物語を用いて旧約聖書の摂理について論じたものである。まず、これを取り上げ、それをさらに発展させることを本稿の主たる目的とする。

上記拙論で論じたのは、創世記22章のイサク奉献物語、そしてヨセフ物語である。この論考では、まずイサク奉献物語を摂理の範例として説明し、それをヨセフ物語において展開し、結論として族長物語において摂理はどう理解されるかを説明した。拙論の主張のポイントは三つある。①摂理は試練と結びつく。②摂理はその時にはわからず、後になって初めてわかる。摂理は人間にはあらかじめ知られることがない秘義である。③旧約聖書には基本的に宿命論も決定論もない。不可知論が支配する。以上を論じ、暫定的結論として筆者が述

べたことは次の点である。

1. 聖書は再考された歴史記述である。つまり、それは信仰告白的記述である。
2. 共同体的な契約認識が土台にある。
3. 人間は自由な決断と主体性によって行動するが、歴史は「にもかかわらず」という仕方で叙述される。

以上で拙論の内容をおおよそ御理解いただけるかと思う。本稿において、「摂理の信仰」という主題に取り組むにあたり、筆者が結論として述べたことをここに再録させていただく。

「摂理」はいわゆる宿命とは区別されなければならない。族長物語の中に宿命思想を見ることはできない。宿命とは神の事前の決定どおりに事が進むということである。しかし、イサク奉獻物語においてもヨセフ物語においても、そこに登場する人間は神の操り人形ではない。アブラハムもヨセフも、事の展開と結果をまったく予想していない。宿命論でも決定論でもなく、むしろ不可知性が支配しているのである。逆説的だが、もしあらかじめ結果が確定しているならば、試練はまったく意味を失う。試練が試練である限り、人は苦しみもがきながら、自らの自由な決断と主体性によって行動するほかない。歴史の支配者である神を信頼して生きるということはそういうことである。したがって、旧約聖書において、摂理はあくまで人間には決して知られることがない秘義なのである。摂理とは、その字義通り「神は先を見ている」ということを人が信じて前に進むことでしかない。「摂理」は振り返って初めてそれが認識される。このような「摂理」は、神の意志が人間の主体性を「試練」という仕方で要請する限りにおいて、歴史の連続性と非連続性の接点を指し示している。旧約聖書では「にもかかわらず」という仕方で歴史が叙述されるのである。」

以上を踏まえ、論考をさらに展開するにあたり、ここで扱うテキストはルツ記とヨナ書である。旧約聖書学ではノヴェレという文学様式に属するテキストである。「ノヴェレ」とは古代の短編小説というほどの概念で、今日ではあまり用いられない様式史的概念である²⁾。どうしてルツ記とヨナ書という二つの

テキストを扱うかという点、先に論じたヨセフ物語もノヴェレに属するからである。ノヴェレは特定の人物をめぐって文学的に考え抜かれた作品であり、それ自体として完結している。まさにヨセフ物語がそうである。この文学様式に属するルツ記とヨナ書において、先に暫定的に提示した結論がどの程度妥当するか、その射程を詳らかにしようと思う。

その前に、あらかじめ確認しておくべきことがある。それは、誤解を恐れずに言えば、旧約聖書に「摂理」を直接的に表現する言葉はないということである。「摂理」とは歴史的記述表現ではなく、信仰告白として再記述された概念であり、その限りにおいて二次的な、すなわち教義学的な概念と言わなければならない。「摂理」に関して焦点となるテキストは、拙論ですでに論じたが、創世記22章のイサク奉獻物語の一節である³⁾。

「そこでイサクは、「火と薪はここにありますが、焼き尽くすいけにえにする小羊はどこですか」と尋ねた。するとアブラハムは、「息子よ、焼き尽くすいけにえの小羊は神御自身が備えてくださる」と答え、二人はさらに続けて一緒に歩いて行った。」(22章7節後半～8節、聖書協会共同訳)

この緊張を孕んだ記述において、アブラハムが語った「いけにえの小羊は神御自身が備えてくださる」が問題となる。アブラハムはこれをどのような意味で語ったのだろうか。通常は、この「神御自身が備えてくださる」は「摂理」を示すと説明される。けれども、ヘブライ語原文は「神は自らにおいて見る」である。動詞ラーアは「見る」という視覚的行為を意味する基本動詞であり、この動詞自体に「備える」という意味はない。文脈から「備えてくださる」と意識したのであって、ラーアという動詞自体に摂理という意味はないのである。本来は、「神御自身が見てくださる」とアブラハムが語ったにすぎず、神の摂理的介入を先取りした表現と見なすことは一步踏み込んだ二次的解釈だと言わねばならない。

言うまでもないが、この箇所は旧約学では伝承史的にいわゆる原因譚と呼ばれる。

「アブラハムはその場所をヤハウエ・イルエと名付けた。それは今日、「主の

山に、備えあり」と言われている。」(14節)

伝承史的には「ヤハウエ・イルエ」という不思議な地名がまず存在し、その地名の謎を説明するためにこの物語ができたのである。原因譚とはそういうことである。しかし、「主の山に、備えあり」というヘブライ語原文は、「主の山において、それは見られる (= 顕現する)」と直訳されるべきであって、これが摂理を意味すると断定することは読み込みではないかという気がする。読み込んだ解釈が先にあると、逆に、テキスト翻訳がそれに引きずられているのである。

8節「(神は) 備えてくださる」をラテン語訳ウルガタは *providere* と訳した。 *pro-videre* は「先を (あらかじめ) 見る」という意味である。ここから、 *providence* 「摂理」という概念が生まれたと言ってよい。つまり、摂理という言葉はこの創世記のテキストが起源だと言うことになる。しかし、ヘブライ語テキスト自体は「神が前もって見てくださる」というアブラハムの信仰告白の表現である。「摂理」という解釈には飛躍がある。この箇所を摂理を説明する証拠テキストとして無批判に受容することはできない。むしろ、拙論で論じた通り、このテキストは「摂理」について人間の不可知性を述べていると説明されるべきである。

2. ルツ記について

(1) ルツ記の文学的構造

ノヴェレであるルツ記は全体として整った文学的構造を示している。主題的に瞥見すると、1章「モアブへの移住とベツレヘムへのナオミの帰郷」、2章「ボアズの畑でのルツ」、3章「ボアズの麦打ち場でのルツ」、4章「ベツレヘムでのナオミの贖い」となる。1章と4章がナオミ/ベツレヘムで対応し、また2章と3章がルツ/ボアズで対応し、対称構造が認められる⁴⁾。とりわけ2章は集中構造を示している⁵⁾。ルツ記全体の枠となるのは、ナオミに対するルツの信頼の約束 (1:16f.) とルツ/ナオミに対するボアズの告白 (4:9f.) である⁶⁾。

(2) 摂理という主題に寄せて

ルツ記は、ナオミという女性の苦しみの果てに幸せがやって来るという結論である。具体的には、ルツがボアズと出会い、オベドという男児を産み、その子をナオミが腕に抱くのである。いわば養子とすることによって、ナオミはダビデの曾祖母となるのである。「近所の女たちは、「ナオミに男の子が生まれた」と言っ、その子に名を付け、オベドと呼んだ。彼はダビデの父であるエッサイの父となった。」(4章17節)が物語の結論を意味する。ナオミ、ルツ、ボアズ、オベドという時系列的繋がりによって、最終的にナオミがシャロームに至るということである。この時系列において、ルツが果たす役割が特記される。ルツはモアブ人であり、このよそ者という異邦人性が決定的な契機になっていることが確認できる。

摂理に寄せて考えると、摂理が最初からあったとはもちろん言うことはできない。しかし、ナオミの苦しみが試練として意味づけられ、最終的に摂理に至るという道筋を辿ることができる。

(3) ルツ記の特徴的思想

ルツ記において、特徴な思想として指摘されるべきは、ゴーエールという思想である。ルツ記に9回出て来る(2:20, 3:9, 3:12②, 4:3, 4:1, 4-6, 4:8, 4:14)。旧約全体で44回の用例であるから、ルツ記に偏って頻出していると言ってよい。これはルツ記では「家を絶やさぬ責任」(新共同訳)と訳されるが、「贖う者」Auslöserである。ナオミが手放さざるを得なかった土地が「贖う者」によって贖われるのである。ナオミがボアズという「贖う者」と出会い、救済されるという物語がルツ記であると言える。ちなみに民数記35章には7回出て来るが、それは「(血の)復讐をする者」と訳される(12,19,21,24,25,27②)。重要なことはナオミの救済にはルツという異邦人が介在することである。モアブ人のルツがボアズと結婚し、その結果、ナオミは贖われるのである。この贖いというテーマがルツ記では一貫している。

この「贖う者」がallusion(聖書内関係箇所)として重要なのはヨブ記19

章25節である。ヨブ記にはたった1回であり、諸書でもルツ記以外には詩編19:15, 78:35, 箴言19:6, 23:11とこのヨブ記の1か所だけである。すなわち、「私は知っている。私を贖う者は生きておられ、後の日に塵の上に立たれる」。ある意味では預言的であるこの記述がルツ記と関係しているのではないだろうか。つまり、ヨブ記の「私を贖う者は生きておられる」という記述が、ルツ記ではそれがボアズによって実現されていると読めるのである。ルツ記の「贖う者」というモチーフはヨブ記に由来していると言えるのではないか。ボアズはダビデの祖先であるから、ルツ記においてはメシアニズムが通奏低音として流れていると言ってよい⁷⁾。このことはルツ記の摂理というテーマを裏書きする。

(4) 小結論

飢饉というやむを得ぬ事情により、ナオミがモアブという地に出て行くことからルツ記は始まる。やむを得ず外国に逃れ絶望的に苦悩するという経験が、しかし、結果的にナオミの救済に繋がったということが出来るだろう。だとすれば、これは歴史的には、イスラエルの民が捕囚を経験した物語と読むことができる⁸⁾。ルツ記は捕囚経験において神の摂理を説明していると考えられるのである。

3. ヨナ書について

(1) ヨナ書の文学的構造

ノヴェレとしてヨナ書は整った文学的構造を示す。主題的に瞥見すると、1章「ヨナの逃亡」、2章「ヨナの奇跡的解放」、3章「ニネベの悔い改め」、4章「ヨナの反抗と神の憐れみ」である。1-2章は外的な逃亡、3-4章は内的な逃亡という括りとして対応し、対称構造を示している⁹⁾。興味深いのは神名ヤハウェ（主）とエロヒーム（神）の交替現象である¹⁰⁾、

(2) 摂理の主題に寄せて

ヨナは神からニネベに遣わされたのに、それに背を向けた。にもかかわらず、ヨナは神に引き戻され、神の命令遂行に立ち帰って、使命を遂行することになる。大海に放り込まれ、大魚に飲み込まれるという紆余曲折を経て、ヨナが立ち帰ったという到達点においてシャロームが回復された。

ヨナ書では思いがけない異邦人との出会いが物語を導く。ヨナが乗り込んだ船にはイスラエルの民とは異なる船員たちがおり、ヨナは彼らにやむを得ず従う。また、ニネベの人々もヨナには他なる人々で、ヨナを翻弄する。にもかかわらず、このような人々がヨナ書において、神の救済へと導く重要な役割を果たしている¹¹⁾。摂理という主題に寄せて考えれば、最初から摂理があったとはもちろん言えないが、神の意志が貫徹されているという点で摂理的な筋書きを読み取ることができる。

(3) ヨナ書の特徴的思想

ヨナ書において、特徴的なのはヨナが大魚に飲み込まれる2章である。ヨナは大魚の腹の中で生存し、しかもその中で神を賛美する。その神賛美は神殿礼拝という場を有する(2:5.8)。この神殿での神賛美は物語としては唐突であるが、物語展開の重要な契機となっている¹²⁾。ヨナは神によって救済された恵みに感謝し、自らの使命遂行に転じるからである。2章の祈りはヨナ書全体の構成において意図されたものであって、後代の編集の付加と見なすわけにはいかない¹³⁾。もう一つの特徴は、ニネベに対する神の慈愛である。これには意表を突かれる。ニネベはアッシリア帝国の都である。神はニネベの人々のみならず、家畜をも配慮するのである(4章11節)。これは、申命記主義的なイスラエル民族主義を超える。イザヤ書19章16-25節でエジプトとアッシリアをイスラエルより優先する普遍主義的な預言とも通じるヨナ書の特徴的思想である。

聖書内 allusion として重要と思われるのは、創世記と出エジプト記である。特に原初史のカイン物語の特徴的表現との allusion が指摘できる¹⁴⁾。「あなたは何をしたのか」(1:10)は「何ということをしたのか」(創世記4:10)と類似

し、「主の御顔を避けて逃亡した」(1:3, 1:10)は「(カインは)主の前を去り」(創世記4:16)と類似する。ヨナが神に背を向けて逃亡するモチーフとカインが神に背を向け追放されるモチーフが対応している。創世記でカインの追放がそうであったように、ヨナ書でもヨナの逃亡は苦悩を伴う人生(歴史)の始まりとなる。

(4) 小結論

大海に投げ捨てられたヨナは大魚に飲み込まれて助かった。ヨナが大海に投げ込まれたのはやむを得ぬことであった。けれども、大魚に飲み込まれるという体験において、ヨナは悔い改め、また生かされた。ヨナはそれゆえに神を賛美している。ヨナは神からの使命をあらためて思い起こし、それに従うのである。大魚に飲み込まれるという出来事がヨナの人生を決定している。これは歴史的に考えれば、捕囚体験を暗示しているのではないだろうか。抗いがたい力で海に投げ捨てられ、巨大な魚に飲み込まれ、そのお蔭で生き延びることができたのはバビロン捕囚を意図していると考えざるを得ない。この捕囚体験が神の摂理を意味することがヨナ書には織り込まれている。

4. 結論的考察

契約の民として自由な決断と主体性に生きたナオミ、ヨナはさまざまな予期せぬ出来事に遭遇した。この先どうなるかは分からなかった。しかし、どちらも不思議な仕方で救済される。そしてシャロームが回復する。ナオミはダビデの曾祖母となり、ヨナは預言者として職務に復帰するのである。

本稿序論の議論に戻るならば、ルツ記もヨナ書も「にもかかわらず」という仕方で歴史が記述される。人間はその先にあることを知ることはできない。しかし、神は先を見ている。その意味で、「摂理」ということが読み取れる。このことは範例として最初に論じたイサク奉獻物語にあてはまり、またヨセフ物語、ルツ記、ヨナ書というノヴェレに共通する。

ノヴェレという文学様式において、生の座を考える必要がある。ルツ記においては捕囚体験が透けて見える。ナオミの家族が故郷の飢饉のために国を出るという体験は、神の計画であって、その苦難の出国経験によってナオミは救済へと至った。ルツ記は士師時代という舞台背景において記されているが、メギロート（ルツ記、コヘレト書、雅歌、哀歌、エステル記）がいずれもそうであるように、ルツ記も捕囚後の成立と説明されるべきである。

これについてはヨナ書も同じで、やはり捕囚体験が透けて見える。大魚に飲み込まれるとは大国バビロニアに飲み込まれる経験であり、にもかかわらず、それは神の計画であって、ヨナは救済された。ちなみに、預言者ヨナの名前は列王記下14章25節に出て来る。ヨナ書以外ではここだけである。それは紀元前8世紀、アッシリア全盛期であった北王国ヤロブアム2世統治下の記述として書かれている。おそらくヨナ書はこの記述から生まれたミドラーシュの文学作品であって、その点でダニエル書と類似する¹⁵⁾。ダニエルもまた捕囚期の伝説的人物だからである（エゼキエル書15章14節、28章3節）。ヨナ書に見られるアッシリアの救済は、アッシリアがイスラエルの脅威であった紀元前7世紀ではありえず、ルツ記の非民族主義的/普遍主義的思想と同様に、明らかに後代の思想である。なお12小預言者にヨナ書が加わっているのは、最初からこの書がノヴェレとして書かれ、イザヤ書の編集と調和させるためにミカ書の前に置かれたと考えられる。というのも、イザヤ書36-39章のイザヤ/ヒゼキヤ物語は物語の記述であって、第1イザヤの最後に位置するからである。12小預言書では6書（ホセア、ヨエル、アモス、オバデヤ、ヨナ、ミカ）、3書（ナホム、ハバクク、ゼファニヤ）、3書（ハガイ、ゼカリヤ、マラキ）として三区分別される。最初の6書は章数が合計39章であって、その最後がミカ書であり、それとの関わりで物語としてのヨナ書が配置されたと考えられる（70人訳ではヨナ書は6番目¹⁶⁾）。いずれにせよ、ヨナ書の成立は捕囚後だと考えざるを得ない¹⁷⁾。

ノヴェレにおいて、創世記22章8節の「神は備えてくださる」がヨセフ物語のみならず、ルツ記においても、ヨナ書においても貫徹しているのは確かである。ノヴェレはそういう意味で、「摂理の信仰」の書として説明できる。ノ

ヴェレでは、登場する人物たちには先はまったく見通せないのである。しかも巨大な力に飲み込まれるという不可抗力的な経験をし、絶望的な苦難や試練が続く。そこに捕囚体験がシンボライズされていると言わざるを得ない。しかし、それもまた神の計画遂行の一部となることを見逃してはならない。この経験を通して神は救済を遂行する。それを示すのがノヴェレとしてのルツ記とヨナ書である。この二書についてノヴェレだからといってただ単に文学構造にだけ注目すべきではない。この二書でイスラエルの民が経験した歴史のダイナミズムが読み解かれなければならない。今、コロナ禍の中で誰もが抗いがたい巨大な力に飲み込まれる如き経験をしている。苦悩は続き、先はまだ見えない。それは、ルツ記およびヨナ書の場合とまったく同様である。われわれが「摂理の信仰」を語るとすれば、この旧約文書が光を放ち、われわれに励ましを与えてくれるに違いない。

(おとも さとし)

注

- 1) 本論文は、2022年1月11日にオンラインで行われた東京神学大学教職セミナー「摂理の信仰」において旧約部門の聖書研究として筆者が発表したものである。
- 2) M.ディベリウス（辻学監訳）『福音書の様式史』、日本キリスト教団出版局、2022年、83頁以下
- 3) 拙著『旧約聖書と教会』、教文館、2022年、13-20頁。
- 4) E.Zenger, *Einleitung in das Alte Testament*. 3.Auflage, Stuttgart, 1998, S.203-204.
- 5) 左近淑「ルツ記の文学的構造と主題」『左近淑著作集第一巻』、1992年、303-335頁
- 6) E.Zenger, *op.cit.*, S.205.
- 7) E.Zenger, *op.cit.*, S.208.
- 8) M.Witte, *Schriften*, in: J. Chr.Gertz (Hg.), *Grundinformation Altes Testament*, Göttingen, 2019 (6.Auflage), S.461.
- 9) E.Zenger u.a., *op.cit.*, S.499f.
- 10) 1:1-3:4ヤハウエ、3:5-10エロヒーム、4:1-5ヤハウエ、4:6ヤハウエ / エロヒーム、4:7-9 エロヒーム、4:10-11ヤハウエ、と交替が見られる。これについては、

- D.Stuart, Hosea-Jonah (WBC 31), Waco, 1987, 501.
- 11) 西村俊昭『旧約聖書における知恵と解釈』、2002年、20頁。
 - 12) このことをD.スチュアートは指摘している。D.スチュアート（山吉訳）『旧約聖書の釈義』、教文館、2017年、77-78頁。
 - 13) P.Weimer, Jona (HThKAT), Freiburg, 2017, S.52.
 - 14) M.Kelsey, The book of Jonah and the theme of exile, in: JSOT vol.45, 2020, pp.128-140.
 - 15) 土岐健治『ヨナのしるし』一麦出版社、2015年、32頁、187頁以下は、これを「パロディー」として理解する。なお、D.スチュアートはヨナ書がミドラーシュであることを否定する。D.Stuart, op.cit., 436.
 - 16) これについては、K. Schmid, Theologie des alten Testaments, Tübingen, 2019, S.118-119 参照。シナイ、アレクサンドリア、バチカン写本のいずれにおいても、ヨナ書は12小預言書の5番目ではなく、6番目である。
 - 17) K. Schmid, Hintere Propheten, in: J.Chr. Gertz (Hg.) Grundinformation Altes Testament, 2019 (6.Auflage), S.393.